1　学校経営グラウンドデザイン

令和８年度 村山市立楯岡小学校 学校経営 グランドデザイン

- □憲法及び教育関係諸法
- □こども基本法
- □学習指導要領
- □第７次山形県教育振興計画

＝校訓＝
志　感動　笑顔
～あきらめない、ありがとう、あいさつ～

- □村山市教育基本目標
- □第３次村山市教育振興計画
- □児童の実態と志
- □楯岡小の歴史と校風
- □地域・保護者・教職員の願い

＝学校教育目標＝
自ら考え、かかわり、未来を拓く子

ぼくたち
わたしたちの
「たてやま運動」

たえない笑顔であいさつ名人
てきぱきはたらくしごと名人
やさしい心のしんせつ名人
まいにちさわやか元気名人

【平成15年　児童会制定】

令和８年度　教育スローガン
キラリ！楯小プライド！
～自分で、自分たちで、考える　決める　行動する～

令和８年３月　児童が決めたスローガン
「みんながキラリ」
みんなの合言葉～声がピンッ！　心ポカポカ～

３　COMSを
生かして
Community　コミュニティ形成力
Comment　コメント力
Communication　コミュニケーション力

目指す子供像
【自立】自分の足で立ち、進む方向を自分で決める子
【共生】違いを認め合い、共に心地よい場所を創る子
【参画】自分たちの社会を
自分たちの手でよくしようとする子

目指す教職員像　「チーム楯小」
【自立を支える伴走者】子供の試行錯誤を支える教師
【共生を支えるコーディネーター】
多様性を認め、対話を重んじる教師
【参画を支えるデザイナー】
子供を信頼し、活躍の舞台を創る教師

≪経営の重点≫
「はじめに子どもありき」子どもの力を引き出し、伸ばす
【教えることの復権】「指導観のある教育」
【和顔愛語　先意承問】「チーム楯小の組織力」

自立
じぶん・なかま
問題解決力
①「問い」を自分事として捉える力（課題発見）
②試行錯誤を恐れない「レジリエンス」（実行・修正）
③必要なリソース（資源）を活用する力
④振り返り（リフレクション）による抽象化

共生
みとめる・心地よさ
感じる力
①感情の言語化（自分の心を知る）
②「立場を入れ替える」想像力のトレーニング
③「違い」をポジティブに捉える体験
④教師や大人の「共感的なモデリング」

参画
かかわる・挑む
人と関わる力
①「聴く・伝える」のコミュニケーションの基盤
②合意形成（コンセンサス）のプロセスの習得
③「貢献」を実感できる場のデザイン
④失敗を許容する「心理的安全性」

保護者、家庭
心に響くPTA活動
早寝、早起き、朝ごはん
メディアコントロール

社会に開かれた教育課程の実現

地　域
学校運営協議会、後援会、育成会との連携
学校だより等による情報発信

２　学校経営概要

村山市立楯岡小学校

１　教育目標～伝統を受け継ぎながら、未来を生きる力を伸ばします～

自ら考え、かかわり、未来を拓く子

令和８年度の楯岡小学校の教育目標は「自ら考え、かかわり、未来を拓く子」を掲げます。この目標には、激動する現代社会を生き抜くために必要な資質と、教育基本法や学習指導要領が目指す理念を凝縮させています。

この目標を定めた背景には、主に以下の３つの視点があります。

１　社会背景：予測困難な時代の到来（VUCA）

現代は VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代と呼ばれています。

・知識のアップデート：科学技術（AI など）の急速な進展により、今日学んだ知識が明日には古くなる可能性があります。
・正解のない問い：　環境問題や多様性の尊重など、単一の正解のない課題が増えています。
・背景にある思い：　「教えられたことを覚える」だけでなく、自ら課題を見つけ、主体的に判断する力を育まなくてはならないという危機感と期待が込められています。

２　文部科学省の指針「生きる力」と「社会に開かれた教育課程」

この目標は学習指導要領の根幹である「生きる力」を具体的かつ分かりやすく言語化したものです。

・自ら考え（知）：基礎的な学力を基盤に、思考力・判断力・表現力を磨くこと。
・かかわり（徳）：他者と協働し、対話を通じて異なる価値観を認め合うこと。
・未来を拓く（意）：学んだことを人生や社会に生かそうとする実践的な態度。
・背景にある思い：学校を閉ざされた空間にせず、地域や社会と連携しながら、社会をより良くする「創り手」を育てたいという願いがあります。

３　子供の変容と人間関係の希薄化への対応

近年の子供たちを取り巻く環境（SNS の普及、少子化、コロナ禍の影響など）も大きく影響しています。

・リアルな体験の不足：直接的なコミュニケーションや、集団の中での葛藤を通じた成長の機会が減っています。
・背景にある思い：あえて「かかわり」という言葉を盛り込むことで、自分一人で完結せず、多様な人々と手を取り合うことの尊さを伝え、豊かな人間性を育みたいという意図があります。

２　令和８年度教育スローガン

キラリ！楯小プライド！

～自分で、自分たちで、考える　決める　行動する～

令和８年度３月　児童が決めたスローガン
「みんながキラリ」　みんなの合言葉～声がピン、心ポカポカ～

校舎を巡視したとき、体育館の後ろに上記の素敵な言葉が掲げられていました。「みんながキラリ」。なんて素敵な言葉でしょう。ただ、決まった日付が３月です。決まってから、実践、振り返りと子供が向き合う時間はなかったように感じました。もったいない。「自分たちで決めたこと」は「実行するもの」です。

そして、子供たちにも、教師にも覚えやすく、教育目標をイメージしやすいものにするために、教育スローガンを掲げることにしました。

「キラリ！」に込める意味：自立と共生

「キラリ」という言葉は、個の輝き（自立）と、それらが集まった時の調和（共生）を象徴しています。

・自立の輝き：子供一人ひとりが自分の得意なこと、挑戦していること、自分らしさを発揮している瞬間が「キラリ！」です。教師が伴走者として、子供の内なる光を見つける姿勢も表現しています。

・共生の輝き：異なる色（個性）を持った「キラリ！」が混ざり合い、お互いを照らし合う状態です。多様性を認め合い、共に光り輝く学校の姿を表しています。

「楯小プライド！」に込める意味：参画と当事者意識

校名をスローガンに入れることで、目指す方向性が「どこか遠くの理想」ではなく、「この場所、この仲間で成し遂げること」として具体化されると考えます。「楯」という字には、自分にや仲間を守る、あるいは信念を貫くといった意味があります。「自立」して自分を律し、「共生」して仲間を守り、「参画」してより良い未来を切り拓くという、学校の姿勢と重なります。

「プライド（誇り、尊厳）」は、自分がその集団の一員であるという自信と、それをより良くしていこうとする「参画」の意思から生まれます。「自分たちでこの学校（生活）を創っている」という実感が、楯小プライドの源泉です。子供たちが学校運営や行事に主体的に関わることで、「私たちの楯小」という強い愛着と誇りが育まれると考えます。また、子供たちだけでなく、教師も「楯小の教職員であること」に誇りを持ち、地域住民も「私たちの楯小」と自慢できるような学校を目指したいという思いがあります。学校経営の基盤にある「社会に開かれた教育課程」との整合性がここにあります。

３　目指す子供の姿

【自立】自分の足で立ち、進む方向を自分で決める子
【共生】違いを認め合い、共に心地よい場所を創る子
【参画】自分たちの社会（生活）を自分たちの手でよくしようとする子

【自立】

自立は、単に「一人で何でもできる」子供ではありません。自分の状況を理解し、必要な助けを求めながらも、主体的に動く子供を指します。

具体的な姿

〇学習：わからないことがあった時、「どこがわからないのか」を自分で整理し、調べたり、質問したりして解決しようとする。

〇生活：持ち物の準備や宿題、早寝早起きなど、大人の指示を待たずに自分のルーティンとして取り組む。

〇精神面：失敗したときに「誰かのせい」にするのではなく、「次はどうすればいいか」と切り替えて考える。

【共生】

自分とは異なる意見や背景を持つ他者を尊重し、折り合いをつけながら豊かな人間関係を築く力です。

具体的な姿

〇対人：自分とは違う意見を聞いた時、否定から入らず「そういう考えもあるのか」と受け止めることができる。

〇多様性：得意なこと、苦手なことが人それぞれ違うことを理解し、自然にサポートし合える。

〇解決：友達とトラブルになった際、感情的にぶつかるのではなく、お互いが納得できる「落としどころ」を話し合いで見つけようとする。

【参画】

単なる「参加（その場にいること）」ではなく、当事者意識をもって働きかけ、集団や社会に貢献しようとする姿勢です。

具体的な姿

〇学級・学校活動：係活動や委員会で「言われたからやる」のではなく、「クラスがもっと楽しくなるにはどうすればいいか」を提案し実行する。

〇行事：運動会や学習発表会で、自分の役割が全体のどこにつながっているかを理解し、責任を全うする。

〇社会：地域のごみ拾いや節電など、身近な課題を「自分事」として捉え、小さなアクションを起こせる。

4　目指す教職員の姿

【自立を支える伴走者】子供の試行錯誤を支える教職員
【共生を支えるコーディネーター】多様性を認め、対話を重んじる教職員
【参画を支えるデザイナー】子供を信頼し、活躍の舞台を創る教職員

【自立を支える伴走者】子供の試行錯誤を支える教職員

子供が自分で考え、決める機会を奪わないことが大切です。正解をすぐに与えるのではなく、プロセスを支える指導者を目指します。

具体的な行動

○子供が困っているとき、すぐに答えを教えるのではなく「どうすればいいと思う？」と問いかけ、思考を促す。
○失敗を「ダメなこと」ではなく、「学びのチャンス」として捉え、子供が再挑戦しやすい空気を創る。
○教師自身が自分の仕事に誇りを持ち、自律的に学び続ける姿を見せる。

【共生を支えるコーディネーター】多様性を認め、対話を重んじる教職員

「みんな一緒」を強いるのではなく、一人ひとりの違いを価値として捉える環境を整える役割になります。

具体的な行動

○クラスの中に多様な意見が出た時、それらを丁寧に拾い上げ、比較・検討する議論の場をコーディネートする。
○特定の子を排除しない、安心・安全な学級経営（心理的安全性）を徹底する。
○同僚や保護者、地域の人々と柔軟に協力し合い、大人同士が「共生」しているモデルを子供に示す。

【参画を支えるデザイナー】子供を信頼し、活躍の舞台を創る教職員

「学校の運営者は教師である」という固定観念を捨て、子供たちに「自分たちが主体である」という実感を持たせるデザイナーです。

具体的な行動

○学級目標の決定や行事の運営など、可能な限り子供たちに権限を譲渡しつつ、意思決定を委ねる。
○「学校の決まり」などに対しても、「なぜ必要なのか」「変えられる部分はないか」を子供と共に考える。
○子供の小さな提案やアクションを肯定し、「自分たちの働きかけで環境が変わった」という成功体験（自己効力感、自己肯定感）を積み、育む。

5　経営の重点

「はじめに子どもありき」子どもの力を引き出し、伸ばす
【教えることの復権】「指導観のある教育」
【和顔愛語　先意承問】「チーム楯小の組織力」

「はじめに子どもありき」子どもの力を引き出し、伸ばす

現代社会は「予測困難な時代（VUCA）」と呼ばれ、技術革新やグローバル化が急速に進んでいます。その一方で、子どもたちを取り巻く環境には、不登校の増加、SNS に起因する人間関係の希薄化、体験活動の不足など、深刻な課題が山積しています。 教育情勢においても、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が求められていますが、時として制度や形式、あるいは大人の都合（カリキュラムの消化や管理のしやすさ）が優先され、肝心の子どもの実態が置き去りにされる危惧があります。

本校が掲げる「はじめに子どもありき」とは、単なる子ども中心主義（児童中心主義）への回帰ではありません。それは、「すべての教育活動の出発点と終着点を、目の前の子どもの姿に置く」という決意です。

存在の全肯定：子どもを「指導の対象」として見る前に、一人の人間として尊重し、その存在そのものを価値あるものとして受け入れる。

主体性の尊重：教師が「教え込む」のではなく、子どもの内側から湧き出る「知りたい」「やりたい」という知的好奇心や願いを教育課程の核に据える。

個別への最適化：平均的な「子ども像」に合わせるのではなく、一人ひとりの特性、背景、ニーズに寄り添った支援を展開する。

【教えることの復権】「指導観のある教育」

「訓導」この言葉を聞いたことはあるでしょうか。主に明治時代から戦前にかけて、小学校の教員を指す言葉として使われていました。職名として「訓導」と呼称されますが、意味としては「教え導く」ということです。

日本の教育界の潮流が「自ら学ぶ」「主体的に学びに向かう」学習者の育成に重点が置かれるようになってきました。これまでの教育が「詰め込み」や「教え込み」に偏ってきたことへの反動からかもしれません。それでは、教師は「伴走者」か。私たち、教師はあくまで「訓導」である、という自負と責任を負わねばならないと考えます。

本校では、流行りの教育観に振り回されることなく、もう一度「教えるということ」を正面から捉え直すために、授業改善に取り組みます。

「認知能力」「非認知能力」「言語能力」「教科の特性」、定義付けすることは多々あります。しかし、教職員全員が同じベクトルで「指導」について考えること、意図を揃えることは、時間をかけても行っていきます。

【和顔愛語　先意承問】「チーム楯小の組織力」

「和顔愛語」で心をつなぎ、「先意承問」でニーズに応え、「チーム楯小」で課題を乗り越える。

１　組織的な対応の合言葉は「チーム楯小」

個人の経験や能力に頼るだけでなく、情報の共有（報告・連絡・相談）を徹底し、学校全体で課題を背負う体制を構築します。

（1）「一人で抱え込まない」

困難な事案こそ、学年・分掌・管理職が一体となって迅速に対応する。

２　「和顔愛語」と「先意承問」に込める想い

児童、保護者、そして同僚と接する際の基本姿勢として、この二つの言葉を掲げます。

（1）「和顔愛語」

「和やかな笑顔と、思いやりのある言葉で接する」これは教育の原点です。私たち教職員が穏やかな笑顔と温かな言葉遣いを実践することで、子供たちの心を開き、自己肯定感を育みます。

（2）「先意承問」

「相手の気持ちを先に察し、何を求めているかを問いかける」子供の変化や保護者の不安にいち早く気づき、先回りして寄り添う姿勢を大切にします。言われるのを待つのではなく、こちらから心を通わせにいく能動的な教育活動を行います。

むすびに

「教育活動は学校にとどめない。」

学校教育、家庭教育、社会教育がリンクし、それぞれの強みを発揮して、子供を育んでいく必要があります。そのために学校運営協議会を立ち上げ、「学校でできること」「地域で育むこと」を明確にし、育む子供像を明確にし、歩調を合わせていきます。また、教職員の働き方改革として、「働き甲斐」「生きがい」や「職業人」「社会の中の自分」を教職員個々に考え、自身のライフワークバランスを意識することが教師の豊かな人間性を育むことになると考えます。

「笑顔で子供の前に立つ教師」

これに尽きます。そのために子どもに関わる全ての人が教育環境を整えることに尽力していくように構成していきます。

本校の教職員は、使命感を持ち、子供のことを第一に考える素晴らしい教職員集団です。その力が存分に発揮できるような教育環境の整備に努めていきます。